
陰陽師と鍊金術師

ハヤブサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陰陽師と鍊金術師

【Zマーク】

Z7332Z

【作者名】

ハヤブサ

【あらすじ】

私はエリート魔術師、葛葉。

妖狐を下僕にしようとしたが失敗してタイムスリップしちゃった。

失敗

【葛葉】

「よしつと、こんなんでいいかな？」

私の足下には一週間かけて描いた魔法陣だ。

魔法陣の図面とにらめつにして一生懸命描いたのだった。

「よし。」私は汗を拭つてふうと息をついた。

「妖孤、召喚！」

魔法陣の中で呪文を唱えた。

今、私の足下に魔法陣が一つある。私はその中に立つており、周りを囲うように3つの魔法陣がある。そのうちの一つの中の时空がねじれ始めた。

うまく言つているわね・・・それにしても暑いわ。

私はもう一度汗を拭つた。

しばらくすると、时空のねじれの中から妖孤・・・九尾が現れ始めた。

九尾は低い吠え声で叫んだが、同時に私を囲む残り2つの魔法陣からエネルギーが吹き出て、九尾を縛り付けた。

九尾はのたうち回り、魔法陣の綻びを探したが見つからない。いや見つかる訳ない。

私が一週間かけて描いたんですもの。綻びなんてあつて堪りますか。私は懐から小さな壺を取り出した。

「吸收！封印！」私は鋭く呪文を発した。

九尾の肉体が一部分吸い込まれていくが、まだ抵抗する。

仕方ない。もうちょっと攻撃しようかな・・・。

と思ったその時、魔法陣が崩壊する恐ろしい音が聞こえてきた。バカな！綻びはないはず・・・。

そう、なかつたが、作つてしまつたのだ。

自らの汗が魔法陣を微かに消してしまつていた。

くつ、これまでか！

私は即座に対応呪文を唱えたがもう遅い。

九尾が逆に吸収呪文を使ったのだ。

ああ、私の人生、これまでか・・・。

私の肉体は魔法陣の時空の乱れに吸い込まれていく。

九尾の肉体に吸い込まれていく・・・。

「おい、大丈夫か！」うにゃー？

「おい、生きているぞ！」「早く牛車を！」

騒がしい・・・え？ 生きている？

私は目を開けた。

「ああ、大丈夫かい？」男の優しい声。逆光で顔がよく見えない。

「ええ、大丈夫です。ここは？」私が答えながら立とうとするが男が押しとどめた。

「顔色が悪いから、立たない方がいい。ここは岩窟だ。」

「あの、貴方は？」

「ああ？ 私かい？」太陽が雲に隠れた。

「私は安倍晴明。駆け出しの陰陽師だよ。」

彼は真っ白な歯をきらりとさせた。

私たちは彼の館についた。
寝殿造の立派な家だ。

「お帰りなさい。貴方。あら、このお方は？」

十一単（多分）を着込んだ女人が出てきた。

「岩窟で気を失っていた。放ってはおけなかつたんだ。」彼は言つ。
そして、ある部屋に通された。

「それで、君は誰なんだ？」彼に尋ねられた。
「自分でも分からないんですけど・・・。」

私は自分自身のことを話し始めた。

私は源 葛葉。14世紀、ヨーロッパに渡つて鍊金術及び召喚術を

十年間かけて学んだ。

その後、日本に戻り、過去から妖狐を召喚しようとしたが失敗。どういう訳か、平安時代に来てしまったのだ。

先祖は源 賴仲と言われているが定かではない。

「・・・つて訳です。」私は話し終えた。

「ほつ、興味深いの。」彼は興味津々に私を覗き込んだ。

「葛葉と言つたな。暫し、我が邸宅にいても構わない。」

安部晴明は微笑んで言つた。

「あ、ありがとうございます。」

しかし、驚いた。昔の人だから古めかしい喋り方をしていると思ったがそうではないよう。

晴明は私のことをじっと見ていた。やがて、口を開く。

「こここの部屋を自由に使ってくれ。ええと、それから、」彼は手を一度叩いた。

隣の部屋から音もなく可憐な少女が出てきた。

「」の侍女を自由に使ってくれ。

彼はそう言つと、部屋から出て行つた。

・・・。

私と侍女の間に妙な沈黙が漂つた。

しばらくして沈黙を破つたのは・・・。

ぐうううううううう。

威勢のいい音を鳴らした私のおなかだった。

「お食事をお持ちします。」侍女は隣の部屋に消え、程なくして戻つてきた。

ご飯と焼き魚、汁物もある。そして酒。

「どうぞ、召し上がり下さい。」彼女は食事を置いて言つた。

「ねえ、」躊躇しながら私は言つた。「一緒に食べない?」

「・・・よいのですか?」侍女の瞳にチラツと光が走つた。

「どうぞ、どうぞ。」私は酒を取りながら言つた。

初任務（前書き）

これから葛葉と晴明、交互の話になります。

今日は晴明。

【晴明】

「巴、わかつてくれ。」私は言った。

「放つておく訳にはいかないんだ。その人を。」

巴はため息をついた。

「あのねえ、昔から貴方の性格は分かっていたけど、こんなお人好しちとはね。

いいわ。三ヶ月間よ。三ヶ月間ならこの家にあの女を泊めてもいいわ。」

「ありがとう、巴。」私は礼を言つてその場を下がつた。

彼女を泊めておくには理由があった。それを確かめなければ・・・。

私の家は代々、陰陽師をやって来た。

祖父が西洋から密輸した本にはエクソシストだがそんな名前で知ら
れているらしい。

最近、貿易の取り締まりが厳しくて、旨くいかないがこの本で頭に
大分の知識は入った。

おかげで、祖父、父の儲けで寝殿造のいい邸宅が建つた。
しかも、歴史書もいよいよにいじれる。
さてと・・・。

私は葛葉がいる部屋に再度戻つた。

「入るぞ。」そう言つて入ると・・・。

何だ、これは。思わず眉をひそめた。

二人の少女が横になつていた。絡み合つて。

そして何より・・・部屋が酒臭い。

ふう、仕方がないな。

私は指を鳴らした。音もなく、もう一人の侍女が来る。

「和子、片づけておけ。」私はそう命ずると外に出た。

和子は由紀子と違つてよくできる。仕事を無駄なく出来るのだ。

その代わり、由紀子には人を惹きつける魅力があるのだ。

パチンと指を鳴らした。小悪魔が現れる。洋書だとピクシーかインプと書かれていた。

「天皇に書簡を持つて行け。」インプに書簡を渡すと、奴は姿をくらました。

次に強力なインプ・・・つまり妖靈を呼び出した。

「あ？呼んだか？」出てきた妖靈は間抜けな顔をしていった。

「呼ばなきやお前は来ないだろ？田んぼに出たイナゴを始末して欲しい。」

「お安い御用や。」彼は風を巻き起こして消えた。

私は書斎に戻つて椅子に深く座り込んだ。

妖靈を扱うのも苦労する。時々、ひねくれた奴もいるからだ。

ポン、と田の前で音がした。妖靈が現れる。

「安倍様、御依頼書です。それと柳葉先生からのお手紙です。」妖靈は手紙を差し出した。

「ありがとう。」私はそう言つと、手紙を受け取った。

依頼書は初めてだ。きっと先生の手配だらう。

『洞窟に蠢く大蛇を退治して欲しい。』依頼書の内容。

次に先生の手紙を開けた。

『柳葉だ。お前も強い妖靈も操れるようになつたようだし、一つ仕事を。』

短いメモが入つていた。

柳葉先生は古き妖術を使いこなす先生で、私に妖術を教えてくれた。

私は依頼書で現場を確認すると、陰陽師鞄を取り出した。

式神が3・・・石灰が1壺分・・・魔除けの草、3本・・・祭壇一式・・・。

私は確認が済むと鞄を背負つた。

『出立・・・ですか？』巴がやつて來た。

「ああ、初任務だ。」私はそう言いながら杖を手に取つた。

「早く帰つてきて下さいね。」彼女は目を伏せながらそう言つた。

彼女の顎を片手でクイッと上げて、軽く接吻をした。

「達者で。」

葛葉の部屋に行くと、もう彼女らは起きていた。

「ご主人様、任務ですか？」由紀子が尋ねてきた。

「ああ、洞窟で妖を退治する。」私は短く答えた。

「由紀子、葛葉のことを頼んだぞ。」私はそう言いつつ部屋から出ようとした。

その私を引き留めたのは氣丈な声だった。

「私も同行してよいですか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7332n/>

陰陽師と鍊金術師

2010年10月20日14時33分発行